

宮澤賢治が「勉強」したアンデルセン童話本

—「暗闇で毛を逆立て、パチパチ火花を出す」猫をめぐつて—

木村直弘

序

宮澤賢治は、いつごろアンデルセン童話を知ったのであろうか。

賢治が盛岡高等農林学校三年生の時に友人達と同人誌『アザリア』を発刊して約半年後、この同人誌とともに立ち上げた親友・俵阪嘉内宛て一九一八（大正七）年一月二日一六日付け書簡「九五」で、賢治が「アンデルセンの物語を勉強しながら次の歌をうたいました」と前置きして、アンデルセンの童話集『絵のない絵本』第二八夜の内容をふまえた六首の短歌を書き送っていることは、よく知られている。ここで看過されるべきでないのは、アンデルセンの童話が「勉強」の対象となっていることである。この書簡

で「アンデルセン」というドイツ語の発音に基づいた片仮名表記がなされていることから、賢治が当時ドイツ語の授業でアンデルセン童話に触れる機会があったと考えられ、おり、賢治のアンデルセン受容に関する多くの先行研究がアンデルセン童話と賢治童話との共通点を指摘していることに鑑みれば、それは単なる語学の勉強に止まることはなかったと考えてよいだろう。

たとえば、賢治のアンデルセン受容というトピックでよく参照される西田良子の論考では、アンデルセン童話「みにくいアヒルの子」について、「セロ弾きのゴーシュ」に登場する眼や額からばちばち火花を出す猫や、「よだかの星」におけるさまざま「表現」との類似、あるいは「よだかの星」「氣のいい火山弾」「虔十公■林」などにおける、内に隠された非凡な資質といった「モチーフ」や、そうし

た資質が自ずと顕現し素晴らしい結果をもたらすという「テーマ」の類似が指摘される。また、アンデルセン童話「雪の女王」については、「貝の火」のラストシーンとの類似、「蛙のゴム靴」「鳥の北斗七星」における「素材」面での類似、「図書館幻想」「マリヴロンと少女」「ガドルフの百合」の登場人物名との類似などについても言及される。

あるいは、天沢退二郎と脇明子の対談では、挽歌群に関連して、アンデルセン童話「雪の女王」と賢治作品との繋がりについて触れられている。すなわち、「雪の女王」は、ゲルダという女の子が雪の女王にさらわれたカイという男の子を捜しに北へと旅し最終的にカイを見つけ帰還するという内容だが、このゲルダと賢治作品における「ギルちゃん」(「青森挽歌」)や「ギルダ」(「春」変奏曲)、カイと「蛙のゴム靴」に出てくる「まるでカーイのやうだろう」という記述との繋がり、あるいは「雪の女王」での花のおしゃべりの場面と「ひのきとひなげし」との類似等について言及される。^④

以上の例からも看取されうるように、賢治作品とアンデルセン作品との類縁関係についての言及は基本的に推測の域を出ないため、そのトピックは深められにくい。そこで、この小論では、これまでもたびたび取りあげられてきた賢治のアンデルセン受容について、賢治が「勉強」したであ

ろう外国語テキストを検証・特定することによって、改めてその影響関係の手がかりを得ることを目的としている。

(一) 賢治とドイツ語

賢治の残した記述に初めてアンデルセンの名前が登場した前述の書簡「九五」について、新校本全集には以下の記述が見られる。

*アンデルゼンの物語……アンデルセン(デンマーク語読みは「アヌルスン(アナスン)」、ドイツ語読みで「アンデルゼン」)の『絵のない絵本』。白鳥の話は「第二十八夜」「聞けよ。(Hör!)」は「第十七夜」「第二十四夜」のはじめの「月が話してくれたこと」を聞いてください」に相当する。なお「それでもわたしは画工です」(「五〇八 発電所」下書稿^⑤)。第三巻所収)は、この本の序文の言葉。ドイツ語の勉強のため、独訳本によっている。

前述のように、すでに賢治のアンデルセン童話受容については多くの先行研究があるが、これらに共通する前提として、賢治は、ドイツ語の「勉強」の際読んだ独訳本を通

してアンデルセン童話から影響を受けたということがあ
る。たとえば、前出・西田良子は次のように記している。

賢治はアンデルセンを「アンデルゼン」とドイツ語
風に書いている。それは大正五年の夏、東京神田の独
逸学院の夏期講習会に参加して以来のようである。こ
の時彼は、テキストに載っていたアンデルセン童話に
興味を覚えたのであろう。

書簡「九五」が書かれる一年前、すなわち盛岡高等農林学
校二年在学中の一九一六（大正五）年八月一日から八月三
〇日の間、賢治は東京・神田の東京独逸学院の「独逸語夏
季講習会」に通っていた。また、大村仁太郎・山口小太郎・
谷口秀太郎共編『独文読本第一』（独逸語学雑誌社、一八
九七年）五八頁所収の詩「86. Des Wassers Rundreise」（水
の周遊旅行）の意）中の二行目と三行目「*O du eiliger
Geselle, / Eile doch nicht von der Stelle!*」が、「青森挽歌」
中に「お、おまへ、せわしいみちづれよ／＼どうかここから
急いで去らないでくれ」と片仮名ルビで登場することもよ
く知られている。よって賢治がこの教科書でドイツ語を学
んだのはほぼ確実であるが、この教科書は、盛岡高等農林
学校図書館蔵書にもあるため、賢治がこれで学んだのは、

前掲夏期講習会でというよりは同校のドイツ語の授業でと
考える方が自然であろう。

では、賢治は、どのようなテキストによって書簡「九五」
に書かれていた「アンデルゼンの物語を勉強」したのであ
ろうか。独文学者・植田敏郎は、当時の盛岡高等農林学校
における授業カリキュラム等も調べたうえで、賢治が読ん
だのは、たとえば一九一七（大正六）年八月に富山房より
刊行された長田幹彦訳の『新訳アンデルセン御伽噺』（英
語からの重訳）などではなく、一九一四（大正三）年二月
に南江堂から刊行された内田新也訳によるドイツ語との対
訳本『無画面帖』であると断定する。その根拠は、「アン
デルゼン」というドイツ語読みの片仮名表記が用いられて
いることだけでなく、書簡「九五」にあつた六首をもとに
一九一八（大正七）年一二月に成立した歌稿「アンデルゼ
ン白鳥の歌」十首における日本語の選択がこの内田訳に依
拠していると考えられる点にある。植田によれば、たとえ
ば、第七首にある「かうかうとして」という表現は漢字表
記としては「煌々として」となるが、この「煌々」という
語をアンデルセンのさまざまある『絵のない絵本』対訳本
中で用いているのはこの内田訳だけだという。つまり独訳
文の「*das blitzende Wasser*」を「煌々とした水」と訳し
ているのを、賢治が「かうかうとして／＼鳥はねむれり」と

いう箇所にもつてきたという主張なのだが、かなり強引な理由づけであることは否めない。また、前掲の引用にもあるように、「一九二五、四、二二」という日付をもつ「五〇八 発電所」下書稿(一)〔春と修羅 第二集〕中の「それでもわたしは画工です」に付されたルビ「ドッホ ビン イッヒ アイン マーラー」の由来は『絵のない絵本』の序文と考えられているが、この『無画画帖』の序文(二頁)にある「是れで私も一人前の絵師なので」の独文は「Doch bin ich Maler」と「ein」が欠落しているので、賢治が勉強したのは別の独訳本ではないかとする佐藤栄二の説もある⁽¹⁰⁾。

ともあれ、どの独訳本に賢治が依拠したのかはさておき、『絵のない絵本』の独訳本が賢治の創作に影響を与えていたことは確かであろう。

(二) 英語テキスト

では、『絵のない絵本』所収以外のアンデルセン童話についてはどうであろうか。実は、賢治の作品中、特定のアンデルセン童話と文章的に明確に結びつけることができるのは、『絵のない絵本』と「小クラウスと大クラウス」「みにくいアヒルの子」の二つの童話だけであり、これら以外

の作品でのアンデルセンへの言及は、「僕アンデルゼンのおはなしやなんかもつと読みたいなあ。」(童話「ひかりの素足」)「アンデルゼンの月夜の海を」(「春と修羅 第二集」「三五一 発動機船」)、それに「グリムやアンデルゼンを読んでしまったら」(「春と修羅 第二集」「三七五 山の晨明に関する童話風の構想」)のように、名前が登場するだけである。

たとえば、賢治のアンデルセン受容で必ず引用される、一九二四(大正一三)年二月一日刊行の童話集「注文の多い料理店」『新刊案内』中に見える「大小クラウスたち」という表現が、アンデルセン童話「小クラウスと大クラウス」に由来することはよく知られているが、これは『絵のない絵本』には入っていない。また、童話「猫」に出てくる「アンデルゼンの猫を知つてゐますか。／＼暗闇で毛を逆立て、パチパチ火花を出すアンデルゼンの猫を。」の由来は、アンデルセン童話「みにくいアヒルの子」であることが知られているが、これも『絵のない絵本』にはない⁽¹¹⁾。

しかし、小倉豊文による「宮澤賢治所蔵図書目録」をみてみれば、アンデルセンに関しては、『Andersen's Popular Tales : Hans Christian Andersen』や『Andersen's Fairy Tales : Hans Christian Andersen』と二種の童話集英訳本があったことがわかる⁽¹²⁾。そもそも、日本人がア

ンデルセン童話に触れるきっかけとなったのは、英語読本

『Standard Reading Books』全五巻（一八七三年）であり、

日本人はすでにアンデルセンの没年である一八七五（明治八）年には中等・高等教育でこれらの教科書に収録されたアンデルセン童話の数篇に親しんでいたことが報告されている^①。つまり、当時国内では、ドイツ語教育よりも英語教育においてまずアンデルセン童話に触れる可能性が高かったということになる。

そこで、念のため、ドイツ語対訳本に関する言及に比してほとんど省みられることがなかった前掲目録にある二種類の英訳本について特定すべく、年代、タイトル表記の整合性、国内の図書館での蔵書の有無などいくつかの条件にしばり調査した。対訳本であるとすれば、まず挙げられるのが一九二五（大正一四）年一〇月に北星堂書店から出版されている『Andersen's Fairy Tales (アンデルセンお伽噺)』であるが、賢治が使用した「教科書」としては刊行年が遅過ぎるきらいがある。そこで、海外の英訳本を探してみると、以下が該当する可能性が高い。まず、目録にある前者については

① *Popular Tales for Children by Hans Christian Andersen with many Illustrations.* (London: Ward,

Look & Co, Ltd, 1876)

が挙げられる。一九〇〇年代に入っても同社から改版が繰り返し刊行されている本で、その正式名称は前掲のとおりであるが、本の表紙には『Andersen's Popular Tales / Hans Andersen』とあるので、目録の表記とは矛盾しないと考えてよいだろう。全五〇五頁に六七篇の童話が収められており、たとえば「大小クラウス」に関していえば、七三〜九三頁「Big Claus and Little Claus」というタイトルで、「みにくいアヒルの子」も一八六〜一九七頁に「The Ugly Duckling」というタイトルで収められている。

次に目録の後者であるが、前述の条件に照らすと、同名の本は数種あるものの、盛岡高等農林学校図書館蔵書リストにもある。

② *Fairy Tales from Hans Christian Andersen.* (London: J.M. Dent, 1906) [図書登録番号：二二六七九]

がまず挙げられよう。これはEveryman's Library for Young Peopleシリーズ中の一冊として刊行されており、全三八七頁に四一篇の童話を収めている。「大小クラウス」に関していえば、一四四〜一五四頁に「Great Claus and

「Little Claus」というタイトルで、「みにくいアヒルの子」も三七九〜三八七頁に「The Ugly Duckling」というタイトルで収められている。

あるいは、タイトルの整合性を重視するのであれば、

③ *Andersen's Fairy Tales*. (London & New York: George Routledge & Sons, 1882)

の可能性もある。この本は、Routledge's Sixpenny Seriesの一冊として刊行されており、全六四頁(二段組)に四六篇の童話を収めている。同じく「大小クラウス」に關していえば、一七〜一九頁に「Little Klaus and Big Klaus」というタイトルで、また「みにくいアヒルの子」も二七〜二八頁に「The Ugly Duckling」というタイトルで掲載されている。

ここで少し気になるのは、「大小クラウス」という賢治の表記が原題の「小クラウスと大クラウス」と異なり「大・小」の順になっている点であろう。前掲のように邦訳本でも英訳本でも両者が並存しており、また日本語として「大・大」という表記は通常なされないことを考えあわせれば、この順が賢治の依拠したアンデルセン童話本を特定する有力な根拠にはなりにくい。よって、前掲・植田が試みたよ

うな訳文の対応関係を確認するやり方は、前掲の「アンデルセンの猫を知ってますか。／暗闇で毛を逆立て、パチパチ火花を出すアンデルセンの猫を。」にしか当てはめないことになる⁽¹⁾。以下、前掲英訳本の該当箇所をそれぞれ引用してみよう。念のため直訳も付しておく。

① *Popular Tales for Children* (= *Andersen's Popular Tales*) (一九二頁)

In the hut lived a woman, with her cat and her hen.
And the cat, whom she called her little son, could set up his little back, and purr; he could even send out sparks if you stroked his fur the wrong way.

〔直訳〕

小屋に一人の女の人が、猫とめんどりと一緒に住んでいました。彼女が小さな息子と呼んでいたその猫は、小さな背中を起こし、ゴロゴロの音を鳴らすことができました。もしその毛皮を逆方向に撫でたりしたら、その猫は火花を飛ばさえることができました。

② *Fairy Tales from Hans Christian Andersen* (三八二頁)
An old woman lived there with her cat and her hen.
The cat, which she called "Sonnie," could arch his

back, purr, and give off electric sparks, that is to say if you stroked his fur the wrong way.

〔直訳〕

一人の年とった女の人が猫とめんどりと一緒に住んでいました。彼女が「坊や」と呼んでいたその猫は、小さな背中をアーチ状にしたり、ゴロゴロの音を鳴らせましたし、その毛皮を逆さに撫でたりなんぞした時は、電気火花を放つことさえできました。

③ *Andersen's Fairy Tales* (二八頁左列)

The inmates of the cottage were a woman, a tomcat, and a hen. The tomcat, whom she called her darling, could raise his back and purr; and he could even throw out sparks, provided he were stroked against the grain.

〔直訳〕

その小屋に住んでいたのは、一人の女の人、一匹の小猫、そして一羽のめんどりでした。女の人が可愛い子ちゃんと呼んでいたその雄猫は、背中を上伸ばし、ゴロゴロの音を鳴らすことができましたし、もし逆撫でされてもしたら、火花を出すことさえできました。

こう列挙してみると、賢治の表記にある「暗闇で」に該当する言葉はどの英訳本にもないことがわかる。では、この言葉の由来はどこにあるのだろうか。

(三) ドイツ語テキスト

実は、この「暗闇で」が賢治への独訳本からの影響を考える際非常に有力な手がかりとなる。盛岡高等農林学校図書館蔵書として現在岩手大学図書館に収蔵されているアンデルセン関係の独訳本は以下の二冊である。

④ *Grimms und Andersen's Ausgewählte Märchen.*

(Tokyo: Ikkubundo, 1916, 1917) 〔図書登録番号：一九九一九〕

これは、三浦吉兵衛編で東京・郁文堂書店から一九一六(大正五)年四月一日に発行されたドイツ語読本で、この蔵書は翌年九月一二日発行の改訂二版である。全七〇頁中に、グリム童話から二五篇(「蛙の王さま」「狼と七匹の子ヤギ」「ヘンゼルとグレーテル」「灰かぶり(シンデレラ)」「ブレーメンの音楽隊」「いばら姫(眠れる森の美女)」「白雪姫」「幸運ハンス」「いばらの中のユダヤ人」「七羽の鳥」

「忠臣ヨハネス」「うまい商売」「十二人兄弟」「腕利き四人兄弟」「もの知り博士」、アンデルセン童話から七篇(「裸の王様」「天使」「錫の兵隊」「みにくいアヒルの子」「マツチ売りの少女」「ある母親の物語」「雪の女王」)が収められている。ちなみに、対訳本ではなく、日本語が書かれているのは奥付のみである。

⑤ Hans Christian Andersen, *Märchen*. (Berlin: Hyperion, 1906?) [図書登録番号: 二四六五四]

これはドイツのヒュペーリオン書店から刊行された(発行年未詳)、アンデルセン自身のドイツ語訳による九篇の童話、すなわち「天から落ちてきた一枚の葉」「幸せの長靴」「大クラウスと小クラウス」「まぬけなハンス」「影」「二人のむすめ」「金の宝」「空飛ぶトランク」「人魚姫」を収めた本である(全一七九頁)。

このうち、「みにくいアヒルの子 Das häßliche junge Entlein」(一五～二八頁)が載っている前者④の当該箇所(二二頁)をみてみると、以下のように書かれている(強調は筆者による)。

Hier wohnte eine alte Frau mit ihrer Katze und ihrem Hühne; die Katze, welche sie Söhnchen nannte, konnte

einen Buckel machen und spinner. Selbst Funken konnte man ihr entlocken, wenn man sie im Dunkeln gegen die Haare strich.

〔直訳〕

ここには一人の年老いた女の人が猫と鶏と一緒に住んでいました。その女の人が坊やと呼んでいたその猫は、背中をこごめ、のどをゴロゴロ鳴らすことができました。もし暗闇で、その猫の毛を逆さに撫でたりしたら、火花さえその猫から出させることができました。

つまり、このドイツ語訳でははっきりと「暗闇で」「Dunkeln」と記されているのである。また、「大クラウス」に関連していえば、それが掲載されている後者⑤では「大クラウスと小クラウス Der große Klaus und der kleine Klaus」(五五～七四頁)となっており、賢治の表記の通りである。

念のため、当時よく参照されていた独訳本、インゼル書店版とレクラム文庫版についても確認しておこう。まず、インゼル書店版は全二巻で童話全一一七篇(第一巻六六篇+第二巻五一篇)を収録し、「みにくいアヒルの子 Das häßliche junge Entlein」は第一巻(一八二～一九三頁)にある。当該箇所は以下の通り。

⑥ *Hans Christian Andersen's Märchen*. I. Bd. (Berlin: Insel, 1909) 一八八頁。

Hier wohnte eine alte Frau mit ihrem Kater und ihrer Henne; der Kater, den sie 'Söhnchen' nannte, konnte einen Buckel machen und spinnen, er stob auch Funken, aber dann mußte man ihn gegen die Haare streicheln.

〔直訳〕

ここには一人の年老いた女の人が雄猫とめんどりと一緒に住んでいました。その女の人が「坊や」と呼んでいたその雄猫は、背中をこごめ、のどをゴロゴロ鳴らすことができましたし、火花を散らしもしました。まあ、その雄猫の毛を逆さに撫でたりしちやうた時にですけどね。

このインゼル書店版はアンデルセン自身の独訳をもとにマティルデ・マン (Mathilde Mann) が新たに訳したもので、「im Dunkeln」は見られない。また「大小クラウス」については、「小クラウスと大クラウス Der kleine Klaus und der große Klaus」(一一〇―一二四頁)と、原題どおり小・大の順になっている。

また、レクラム文庫版 (Reclams Universal-Bibliothek) の

⑦ *Andersen's sämtliche Märchen*. (Leipzig: Philipp Reclam, c1919)

も全二巻 (Reclams Universal-Bibliothek I : Nr. 691-695 と II : Nr. 696-700) に分かれており、第一巻 (全五五七頁) に八〇篇、第二巻 (全五四九頁) に五一篇、計一三一篇のアンデルセン童話が収録されている。「みにくいアヒルの子 Das häßliche junge Entlein」は第一巻 (二七二―二八三頁) にある。「大小クラウス」については⑥と同じく「小クラウスと大クラウス Der kleine Klaus und der große Klaus」(一一二―一二六頁)と、原題どおり小・大の順になっている。独訳者としてヘルマン・デンハルト (Hermann Denhardt) の名が挙げられているが、当該箇所 (第一巻の二七八頁) は、④と全く同文であり、「im Dunkeln」が見られるので、④の独訳者はこのデンハルトという可能性もある。

以上見てきたように、「暗闇で」および「大小クラウス」というキーワードで当時の訳書を調べていくと、賢治が、盛岡高等農林学校在学中に前掲④と⑤の二冊のドイツ語テキストを通してアンデルセンを「勉強」した可能性はきわ

めて高い。特に、前掲『春と修羅 第二集』「三七五 山の晨明に関する童話風の構想」に見られた「グリムやアンデルゼンを読んでしまったら」という詩句は、まさに④郁文堂書店刊のドイツ語読本『グリム&アンデルセン童話撰集』との関係を明示するものとも言え、アンデルセンという名前を出す場合は常に「アンデルセン」とドイツ語の片仮名表記で通した賢治の創作に影響を与えたアンデルセン童話所収のドイツ語テキストがここで特定できたと考えてもよいであろう。

結 語

アンデルセン童話から賢治作品への影響関係については、従来シチュエーションや名前の類似といったきわめて曖昧な手がかりをもとに多くの推論が行われてきた。もちろん、こうしたテキスト上の照応関係について調べるには賢治が残した手がかりはあまりに少ない。しかし、本研究によって、少なくとも前掲④に掲載されたアンデルセン童話とグリム童話の諸作品については、賢治作品との照応関係について論じる前提が確保されたように思われる。本稿では、この照応関係について具体的に言及することはしなかったが、すでに別稿で、これまでまったく言及されるこ

とがなかったアンデルセン童話「影法師」(⑤所収)と賢治童話「土神ときつね」との関連について、賢治のユング心理学への関心を補助線にして論じた。これもこの小論の姉妹編として併せてお読みいただければ幸いである。

注

- (1) 原子朗『新宮澤賢治語彙辞典 第二版』(筑摩書房、二〇〇〇年、三七頁) 及び同『定本宮澤賢治語彙辞典』(筑摩書房、二〇一三年、三六頁) には、賢治が小学校三年と四年一学期に担任・八木英三によるアンデルセンを含む童話の読み聞かせを経験していたとあるが、工藤哲夫(「アンデルセンと早変り——賢治の周辺——」(『賢治研究』第一一三号、二〇一一年、三一―三七頁) は、八木が教室での子供たちの喧騒を鎮めるために童話を読んでもやるという意味で用いた「アンデルセンと早変りした」という言葉を、原が誤読していると指摘している。つまり八木が賢治ら子どもたちに読んでやった童話の中にアンデルセンがあつた確証はないという指摘である。
- (2) 西田良子「アンデルセンと宮沢賢治」(『日本児童文学学会編』「アンデルセン研究」小峰書店、一九六九年) 一九一―二〇五頁、あるいは同「宮澤賢治のアンデルセン受容」(西田良子『宮沢賢治論』桜楓社、一九七一年) 一八七―二一〇頁。ちなみに、「セロ弾きのゴーシュ」における、猫が「眼や額からばちばち火花を出す」描

写は、チェロの弦を弓でひいたりマツチを擦る描写と密接に関連している。詳しくは、以下の拙稿を参照のこと。木村直弘「(摩擦)〈震動〉(感染)——宮澤賢治『セロ弾きのゴーシュ』におけるトルストイの芸術論と石川三四郎の動態社会美学のインターフェイヌ——」(『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第一〇号、二〇一一年) 五五〜八四頁。

(3) 天沢退二郎×脇明子「対談 宮澤賢治の『影』の世界」(『国文学 解釈と教材の研究』第四一卷第七号、一九九六年六月) 四〇〜五六頁。

(4) 「青森挽歌」における「ギルちゃん」と「春」変奏曲」における「ギルダちゃん」および「マリヴロンと少女」における「ギルダ」との関連については、本稿の内容とも密接に関連する以下の拙稿を参照のこと。木村直弘「ハイパーテキストとしての(ギルちゃん)——宮澤賢治による〈青森挽歌〉から〈マリヴロンと少女〉へのリンクをめぐる——」(『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第二二号、二〇一三年) 一〇七〜二二九頁。

(5) 『新』校本宮澤賢治全集 第十五巻 書簡・校異篇(筑摩書房、一九九五年) 五九頁。

(6) たとえば、前掲の文献以外には、天沢退二郎「宮澤賢治とアンデルセン」(同『宮澤賢治』論(二二五〜三三四頁)、一九七六年) 二八七〜二九二頁、植田敏郎「宮澤賢治とドイツ文学(心象スケッチ)の源」(講談社、一九九四年)、大澤千恵子「児童文学におけ

る死生観——アンデルセン、宮澤賢治の童話を手がかりに」(『死生学研究』第三号、二〇〇四年) 一四九〜一七二頁、亀井茂「賢治の鳥(2)——アンデルセンの白鳥の歌——」(『野鳥もりおか』第三号、一九八三年) 一〜一四頁、栗原敦「風のことば——賢治とアンデルセン」(同『宮澤賢治 透明な軌道の上から』新宿書房、一九九二年) 一七九〜一八七頁、佐藤栄二「ドイツ語訳「絵のない絵本」と宮澤賢治」(『アンデルセン研究』第一八号、二〇〇〇年) 七六〜八〇頁、佐藤栄二「ドイツ語訳「絵のない絵本」と宮澤賢治——その2——」(『アンデルセン研究』第一九号、二〇〇一年) 五六〜六二頁、鈴木晶「賢治・アンデルセン・キャロル」(『国文学 解釈と教材の研究』第三七巻一〇号、一九九二年) 八九〜九三頁、平澤信一「宮澤賢治における文学の発生・補説「アンデルゼン白鳥の歌」をめぐる——」(同『宮澤賢治(遷移)の詩学』蒼丘書林、二〇〇八年) 四八〜六〇頁、宮澤健太郎「賢治とアンデルセン受容の関係性」(『百合女子大学研究紀要』第四三号、二〇〇七年) 二二〜四二頁、龍佳花「賢治童話がアンデルセンからもらったもの」(『宮澤賢治研究 Journal』第一号、一九九一年) 一二六〜一三九頁、などが挙げられる。

(7) 西田良子「アンデルセン」(前掲『宮澤賢治大事典』二四五〜二四六頁)。

(8) 盛岡高等農林学校図書館には、当時の日本におけるドイツ語読本の定番であった『独文読本第一』(十三版、一九〇三年、「図書

登録番号：三二四）、『独文読本第二』（九版、一九〇三年、[圖書登録番号：三二五]）、『独文読本第三』（七版、一九〇三年、[圖書登録番号：三二六]）、『高等独文読本上巻』（五版、一九〇三年、[圖書登録番号：五九六一]）、『高等独文読本下巻』（三版、一九〇二年、[圖書登録番号：五九六一二]）が収蔵されていたが、どれにもアンデルセン童話は収録されていない。なお、盛岡高等農林学校校友会編『校友会々報』（第三号、大正六年三月一六日発行）の消息欄「図書館便り」（四五―四八頁）に掲載された新取図書リストには「22. Omura etc.——Deutsches Lesebuch.1.」とあり（四五頁）、これはまさに大村仁太郎他編『独文読本第一』であるため、賢治は盛岡高等農林学校在学中にこの教科書で学んだと考えてもよからう。ちなみに、本稿ではその関連についての言及を割愛したが、この「青森挽歌」におけるドイツ語の片仮名表記ルビ部分も、ハイネの詩集「歌の本」の一節に付曲したシューベルトの歌曲（影法師 *Der Doppelgänger*）を暗に参照させることによって、「影」の問題について考察するのに重要な手がかりとなる。詳しくは以下の拙稿を参照されたい。木村直弘「宮澤賢治とドッペルゲンガー——青森挽歌における〈喪〉の視座をめぐって——」（中里まき子編『トラウマと喪を語る文学』、朝日出版社、二〇一四年）八五―九八頁。

(9) 植田、前掲書、二八五―二八六頁。

(10) 佐藤、前掲論文（二〇〇〇年）、七七頁（註2）。ちなみに、平

澤信一（平澤、前掲書、五八―五九頁）は、留保つきながら『無画画帖』説を支持している。

(11) 日本におけるアンデルセン受容史について詳しくは、以下の文献を参照のこと、福田清人「日本におけるアンデルセン紹介史——明治・大正期中心の覚え書き——」（日本児童文学学会編『アンデルセン研究』小峰書店、一九六九年）一三―三六頁。

(12) 境忠一「評伝・宮沢賢治」（桜楓社、一九六八年）四三六頁。ちなみに、同書でのこれら二冊の表記のうち、前者の方に「Andersen's」というミスペリングが見られる。

(13) 川戸道昭「明治のアンデルセン——出会いから翻訳作品の出現まで」（川戸道昭・榎原貴教共編『明治期アンデルセン童話翻訳集成』第五巻、ナタ出版センター、一九九九年）二三七―二七六頁 参照。

(14) もちろん、これら二つの童話は明治期から翻案も含めて邦訳があるので、大正期であれば、前掲・長田訳の『アンデルセン御伽噺』か、一九二四（大正一三）年七月十日に竹友藻風訳で世界童話大系刊行会から刊行された『世界童話大系第四巻・北欧篇 アンデルセン童話集』（英訳本からの重訳）、あるいは同年九月三日に新潮社から楠山正雄訳で刊行された『アンデルセン童話全集（第一巻）』（独訳本および英訳本からの重訳）などを賢治が目にする機会はあったと思われる。ちなみに、前掲二つのアンデルセン童話は、長田訳では「小クラウスと大クラウス」（六九―九六頁）「醜い家

鴨の子」(二二九〜二五六頁)、楠山訳では「大クラウスと小クラウス」(二八〜四四頁)「変な家鴨の子」(四九〇〜五一二頁)、竹友訳では「大クラウスと小クラウス」(二二〜三八頁)「みにくい家鴨の児」(二八二〜一九三頁)というタイトルでそれぞれ取められている。このうち、長田訳は「それに暗い処で体の毛を逆にする」とびかびか火花を散らします」(二四七頁)、楠山訳は「暗闇で体の毛を逆なでにすると、火花をびか〜散らしめました。」(五〇一頁)となつてゐるが、竹友訳には「暗闇で」という言葉は出てこない。ちなみに、この三冊以外に、一九世紀後半から一九一〇年代までに英米で出版された三六冊の英訳本を調べたが、「暗闇で」にあたる表現があつた本は皆無であつた。よつて、長田訳も楠山訳と同様、独訳を参照している可能性が高い。

(15) この本は、発行年未詳だが、同社 (Hyperion-Verlag) の創立は一九〇六年九月二二日なのでそれ以降の刊行と考えられる。

(16) 一九二五(大正二四)年十月四日にアンデルセン五十年祭の一環として東京・青山会館で開催された記念講演会では、講演題目に「アンデルセン」と「アンデルセン」の表記が混在していることを考えると、ドイツ語読みか英語読みかに拘る必要はないかもしれない。

(17) 「宮澤賢治 影への射程 —— アンデルセン童話という回路をめぐつて——」(岩手大学宮澤賢治センター編『賢治学』第一輯、東海大学出版部、二〇一四年) 一三八〜一七六頁。

(文中の賢治作品の引用はすべて筑摩書房刊『新』校本宮澤賢治全集に拠つた。)